

『万葉集』の161番歌

夏井高人

1 はじめに

『万葉集』巻第二には「向南山 陳雲之 青雲之 星離去 月牟離而」との歌（161番歌）との歌がある。古歌集にあるものとの注釈がある。この161番歌の作者については、「奉爲の御齋会の夜に」云々と注記があるので、持統天皇の作だと解するのが一般的だ¹。

161番歌は、一般に、難解な歌の一つとされている。

普通は、「神山（南山）にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて」と読むが、「南山」では挽歌としての意味が通じなくなるとして「北山」と解釈した上で、「北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離れて」と解釈する見解もある²。「牟」も「矣」の誤記（誤写）と解釈するのが通例だ。

161番歌は、その外見上（体裁上）、和歌というよりは、漢詩のように見える。真実は、漢詩の習作断片のようなものがあり、それを『万葉集』の編纂者が作りかえて和歌らしき体裁としたものではなかろうか。例えば、冬の夜空を詠った漢詩（習作）だったと想定すると、「寒向南山 陳雲出之 青雲出之 星離去而 月又離也（冬に南山に行ってみると、たなびく雲があり、青雲があり、星は消え去り、月もまた消え去る³）」といったような漢詩（習作）を想像することができる⁴。

原典テキストの完全性について古来疑義があったのだから、いかようにも想像し

得るし、どのような解釈でもそれが完全に間違いとも正しいとも断定できない困った歌の一つだと思う。

本稿では、素人なりに若干の感想めいたことを述べようと思う。

2 「向南山」は「向北山」か？

「南山」を「北山」と無理に読むのは、「ある書物によれば、法会（御齋会）の際に故人を偲んでつくった歌」と注釈のあることを重視するものと思われる。しかしながら、そのような機会に詠まれたことが確実だとの確証はない。

他方、「向南山」を用いた中国の漢詩における類例としては、『全唐詩』卷一百五十六の「古蛾眉怨」に「宮車晚出向南山 仙衛逶迤去不還」とある。この用例は、「南面」とは意味が異なり、文字通り「南山」に向かって移動することを意味する。

また、古代中国の主要な文献（漢籍）の中には「向北山」との表現が見当たらない。そのような概念や表現方法が基本的になかったのだろうと考えられる。

すると、『万葉集』の161番歌を和歌だと解釈する立場を採る場合でも、当時の精神風土（特に陰陽道）の影響を考えると、古代の中国に存在しなかった観念を和歌の冒頭で用いるということはないのではないかと考えられる⁵。

結論として、「北山」と解する見解は、立論の根拠が極めて薄弱だと考える。

3 「向南山」を「南面」と解するとどうなるか？

『周易』の「説卦」には「聖人南面而聽天下 嚮明而治 蓋取諸此也 坤也者 地

也 萬物皆致養焉」とある。『禮記』の「禮器」には「聖人南面而立 而天下大治」とあり、「大傳」には「聖人南面而聽天下」、「聖人南面而治天下 必自人道始矣」とあり、『大戴禮記』の「子張問入官」には「君子南面臨官」とある。『説苑』の「君道」には「南面聽朝 不失揖讓之禮以求臣 則人臣之材至矣」とあり、「脩文」には「南面者天子也」とある。

「向南山」を「南面者」と解すると、これ自体として「天子」すなわち天皇のことを指すことになる。あるいは、「南山」を「南面者 (=天子)」と解した上で「向南面者」と理解すると、天子(天皇)と向き合う者(皇后)という趣旨になるかもしれない。

このような解釈を前提とすると、『万葉集』の161番歌全体の趣旨としては、「天子(天皇)のような高き御方には高貴な雲が漂い、陽(星雲)の気を示し、星や月のような陰を斥ける」との趣旨のものと解することもできよう。星や月よりも強いものは太陽(太一神)に他ならない⁶。

要するに、161番歌は、陰陽師(または陰陽道・道教に通じた神官・僧侶)からの夢占いの結果・回答のようなもので、それを擬似漢詩形式で表現したものではないかとの仮説をたてることもできるだろう。

このように解する場合、『万葉集』の161番歌は、本来は和歌ではないと理解することになる。161番歌について、倭語による和歌の一つとして無理に理解しようとするよりも、中国流の解釈(漢詩または擬似漢詩だとの前提にたつ解釈)のほうが合理的に説明できるのではないかと思う⁷。

4 雑感

『万葉集』に収録されている作品が、全て完成された形での和歌だと考えるのはやめにするのが妥当だと考える。少なくとも、『万葉集』が編纂されはじめた時期には、明治維新直後に標準語としての日本語が人工言語として形成された時期と同じように、混沌としたインターナショナルな状況の下において未成熟の状態にあったことは疑うべき余地が全くない。神祇で使用する特殊な上代語があったとしても、一般庶民がそれを解した可能性はこれまた皆無に近い。つまり、標準的な意味での倭語（日本語）は確立されておらず、律令制実施の必須の前提となる共通倭語生成実験が繰り返されている最中だったのだと理解して解釈するのが妥当だと考える。

(以上)

[注記]

¹ 中西進『万葉集全訳注（一）』（講談社文庫、1978）129頁は、161番歌と同様に「御齋会の夜に夢のうちに習い給える歌」との注記のある162番歌について、「大后に代わって、夢に霊と対話する占師がいたであろう」としている。何やら弓削道鏡を彷彿とさせるものがある。

² 前掲『万葉集全訳注（一）』128頁は、「天子南面の思想による。南二向クを北とは訓めない」、「中国的表現」、「星・月に陰陽の思想があらう」としている。

³ 夜空の歌とは限らないとの前提で構成してみた。

⁴ この歌には、「夢のうちに習ひ給へる御歌一首」との注記があるから、練習のためにつくった歌（詩）との解釈は十分に成立し得ると考える。

⁵ 飛鳥宮～平城京の時代の地理を考えてみると、宮の北方に古墳をつくった例は皆無に等しい。北山を墓所とする例は、主として平安京以降のことと考えるべきだろう。飛鳥宮～平城京の時代には、都（都）の中軸（中央線）を北面する方向（北方）に延長すると、高句麗國または渤海國に到達するので、あくまでも墓所としての「北山」にこだわるとすれば、高句麗國または渤海國にある墓所を示すと解するしかなくなってしまうことになるだろう。

⁶ 太陽と月との関係については、夏井高人『万葉集』の169番歌「らん・ゆり462号27～44頁」で述べた。ここで述べた構図を前提に考えると、「過去（生前）においては太陽の如く高く輝いていたが、月の舟に乗って星空（常世）に去った」という趣旨の挽歌としての理解も可能だろう。

⁷ 参考となる書籍として、辰巳正明『万葉集と中国文学』（笠間書院、2015）がある。